

読者新聞
(2013年9月12日)



佐藤 淳一 氏 撮影

自動吸引装置

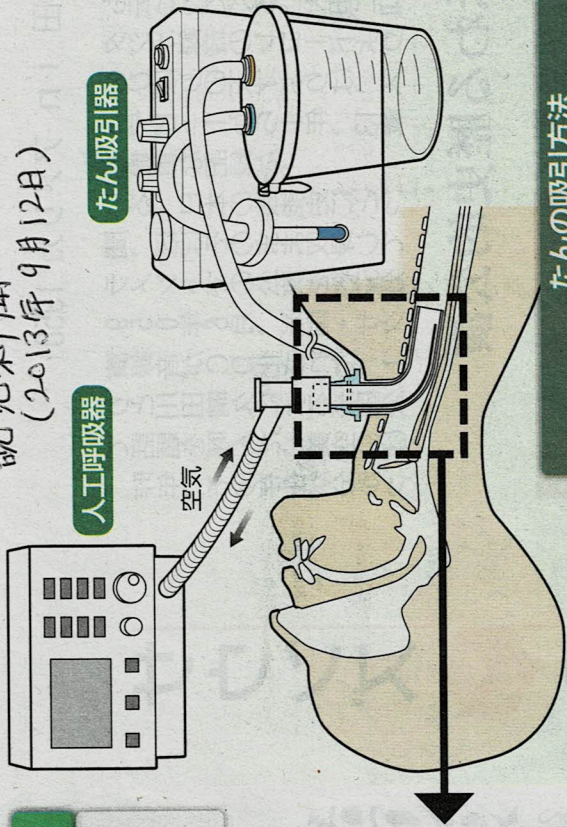
常に微量の吸引を続けるためたんがたまりにくい。手で行う吸引の回数を大幅に減らせる。



従来の方法

看護師やヘルパー、家族らが、細い管をカニキュレに差し込んで頻繁に吸引し出す必要があった。夜間の吸引など、介護者に大きい負担がかかっていた。

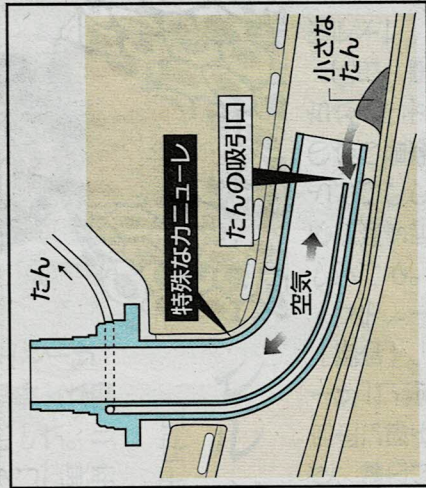
たんの吸引方法



人工呼吸器

人工呼吸器をつけた患者に対し、介護者が手で行っていたたんの吸引を自動で行う装置が登場した。患者や家族の心身の負担軽減につながっている。

たんの自動吸引装置



● **人工呼吸器の使用につながる主な病気やけが**

筋萎縮性側索硬化症(ALS)、筋ジストロフィー、脳梗塞、脊髄損傷などによる呼吸不全

病気や事故で呼吸不全に陥り、のどの気管を切開して人工呼吸器をつけた患者は、自力で排出できないたんを定期的に取り除く必要がある。これが介護者の大きな負担となっていたが、たんを自動吸引する装置が開発され、注目が集まっている。(佐藤光展)

気管切開で装着する人工呼吸器は、全身の筋力が衰える難病「筋萎縮性側索硬化症」(ALS)や、脊髄損傷などで自力呼吸が困難になった患者らに使われる。カニキュレと呼ばれる管をのどから気管に差し込み肺に空気を送る。

カニキュレ内には自力で排出できないたんがたまりやすく、放っておくとカニキュレが詰まるため、たんをほかの人が定期的に取り出す必要がある。人工呼吸器を一時的に止めてカニキュレ内に細い管を差し込み、たんを機械で吸引する方法で、医師や看護師のほか、在宅では講習を受けたヘルパーや家族が行う場面が多い。

吸引の頻度は患者の状態により異なるが、夜間も2、3時間に1回の吸引が必要になることが多い。介護する家族は二晩に何度も起きなければならない、心身に疲弊してしまう。難病の患者は家族の負担を気に病み、人工呼吸器を装着せずに亡くなる人も多い。

たんの自動吸引装置は、患者や家族の悩みを知った大分協和病院院長の山本真さんと、医療機器製造会社社長の徳永修二さんが、1999年に開発を始めた。この試みは厚生労働省が注目し、研究班を組織して完成度を高めた。

徳永さんが当初検討した仕組みは、一定以上たまったたんを感

介護負担の軽減に有用

たん自動吸引装置

●「ひばり&川田 in アメリカ 1950」

昨年、その存在が分かって話題を呼んだ、美空ひばりと川田晴久による米國公演録音がD化された。1950年6月、米國・サクラメントでの公演を約52分間、ほぼそのまま収録している。日本の芸能史として貴重な記録だ。

デビューから1年、13歳のひばりの天才ぶりは、スダジオ録音のレコードよりも伝わってくる。大胆に抑揚をつけた「コペカチータ」、狼曲「唄入の観音経」、英語で歌う「ボクとリボ



天才ぶり伝わる歴史的公演

「一など、幅広い楽曲を完璧に歌い、躍動感も生の舞台ならでは。9曲中7曲が初音源化という。芸能界の育ての親である川田晴久の歌謡漫談の至芸も存分に聴ける。メタはもちろん、生き生きと語られる米國渡航話が当事者の証言として貴重な。音質は驚くほど明瞭。観客の拍手や笑い声も含め、全てが歴史的な記録だ。コロムビアから18日発売。(清)



ポピュラー

サウンドズ BOX



山中千尋

クラシ

ごくロンチックな曲だけピアノスっぽくて男性的な感じを出したかった。リストは私にとっては骨太な印象があるから。「エリゼ」

曲のメロディをしるばせ、幅広い知識を総動員して自ら組み合わせる。「エリゼ」には、ボサノバの名曲「運命」、稲垣潤一、ピク・レイトンまで入っている。「ジャズはあらゆる音楽を包括できる。ジャズといつ、名前つけようのない音楽をやっている楽しさなんです」

20日、東京・紀尾井ホールでライブ。☎03・3498・2881。

知し、その度ごとに吸引する方法だったが、吸引に大きな力が必要で、患者の肺に送る空気まで多く吸い取ってしまう問題があった。

そこで考案されたのが、少ない吸引量で常に吸い取り続ける方法。気道の粘膜を傷つけないように、吸引口をカニエール内に収める工夫もした。

臨床研究の対象患者7人では、夜間に平均2.6回だった吸引回数が、この装置を使うと平均0.5回に減った。人による吸引が6日間必要なかった患者もいた。

2008年に吸引器、10年には吸引口をカニエールの内側につけた特殊なカニエールが薬事承認され、在宅や病院で使用できるようになった。自宅で闘病するALSの男性患者は「妻の負担が減り、ぐっすり眠ってもらえることが何よりうれしい」と喜ぶ。

吸引器の価格は16万円(税別)。公的な給付制度を使うと約10万円で購入できる。カニエールは4570円で、保険がきく。吸引器のこれまでの販売数は約500台。看護師の負担軽減のため導入を検討する病院も増えている。

ただ、この装置は自動吸引装置として薬事承認を得たわけではない。新規の医療機器として承認申請すると多額の費用と長い時間を要するため、通常のとん吸引器とカニエールとして承認を受けた。これらを組み合わせて自動吸引装置として使うのは医師の裁量となり、主治医の理解が欠かせない。

山本さんは「患者や家族が喜ぶ顔を見ると、開発して本当に良かったと思う。様々な学会で有用性を報告し、医師の理解を得ていきたい」と話している。